



令和6年
10月1日
第57号

発行
内外政治
研究G
代表 宮田修一

自民党の総裁選は、決戦投票で高市早苗氏が都道府県連票と国会議員票の合計で194票を獲得しましたが、石破茂氏に21票及ばず、敗れました。

当初は20人の推薦人集めにも苦労した高市氏でしたが、第一回目の投票での党員票は20万3802票にも及び、堂々

党員票1位 20万3800の力を自信に

それは、全国の心ある同志の方々の懸命の電話掛け、そして、都道府県議会や市町村議会の議員の方々の必死の努力があったからでした。高市氏の国家観に共鳴して応援に入った選挙プラン

館の支持者の前に姿を見せた高市氏も疲労困憊の様子で「負けてしまった重大さを痛感していません」と語りました。それでも、声を振り絞って「働いて、働いて、働きまくります」と前を向きました。

皆さまの友情は一生忘れない
【高市氏挨拶(要旨)】
負けてしまったということの重大さを痛感しております。私の力が足りなかった、それだけでございます。こんなにたくさんの方に助けていただいたのに、こんなにたくさんの方の自民党員の方に投票していただいたのに、結果を出せない自分を責めるばかりでございます。本当に申し訳ございません。私はクライフバランスなんてものはありません。働いて、働いて、働いて、働きまくります。皆さまの友情とお力添え、一生忘れません。(決戦投票の結果を受け、衆院第一議員会館で支持者を前に)

「高市総理」が必要になる日は遠くない!

の1位になりました。国会議員票も72票を獲得してトップに3票差にまで迫り、全体1位で決戦に進みました。

誰かが勝利を確信して疑わなかった決戦投票でしたが、水面下では国会議員への激しい「工作」が進んでいました。

投票したのですから。「本性」を現わした石破政権の不安な先行き

安倍元首相の志を継ぐ高市氏の力が必要なのは必ずやって来ます。その日はそう遠くない気がします。新政権を牽制する為にも、全国の真の保守の力を再結集し、これに備えなくてはなりません。

選挙戦を振り返ると、当初は「何とか(決戦に進める)2位までに」が陣営の合い言葉でした。しかし、高市氏への支持は私たちの予想を越えて勢いを増し、左派マスコミによる高市潰しも言える「中傷」をものはねのけ、その訴えは全国に浸透していききました。

菅元首相の副総裁就任や林芳正官房長官の続投などを見れば決戦投票で何があったかは明白です。結果が出た瞬間、茫然自失の心境に陥った方も少なくなかったと思います。しばらくして議員会

石破内閣の閣僚を見渡すと、案の定、一部を除いて、自民党左派で固められた感があります。心配なのは選沢的夫婦別姓ばかりか、女系天皇をも否定しない閣僚の存在です。それらを「封印」したはずの、石破首相の地金が出た印象で

高市氏の元には多くの激励が届いています。その中には「日本を救えるのは高市さんしかありません」との街頭での大学生の言葉もあったと聞きます。



高市氏で陣営を結ぶ決選投票